

University's Challenge

国際交流に取り組む大学

外国語学部の「全員留学」も視野に、日中英トライリンガル人材を育成

杏林大学

2016年4月、東京・三鷹に新キャンパスを開くことを決定し、外国語学部において「日中英トライリンガル人材の育成」を推進している杏林大学。今後は外国語学部の「全員留学」も予定されている同大のグローバル化構想について、今年度から新たに就任したポール・スノードン副学長らに伺った。

「本当の国際人」を育てるため 中国語も全員必修に

「2016年4月から、現在の三鷹の医学部のキャンパス付近に、外国語学部・総合政策学部・保健学部の学生が学ぶ新しいキャンパスがオープンします。文系学部・医療系学部の連携をさらに強めた大学として個性を打ち出していきたいと考えています」と述べるポール・スノードン副学長は、早稲田大学国際教養学部で4年間学部長を務めたこともあり、今春、杏林大学の副学長に就任した。外国語学部を中心としたグローバル人材育成を推し進めている。その構想の一つが、外国語学部学生の「全員留学」だ。「留学は、現在オプションとして用意していますが、今後、外国語学部の学生に一定期間、一斉に留学してもらうことを考えています。4年間の学生生活の間に留学というより大きな刺激を受けることで、将来の選択肢の幅が大いに広がるはずだ」

外国語学部は現在、八王子キャンパスに置かれているが、昨年度、「中国語圏で活躍するスマートでタフな日中英トライリンガル人材の育成」というテーマで文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」に採択され、日本語・中国語・英語による語学力・交渉力の強化に努めている。外国語学部の赤井孝雄学部長は、「これからは世界の先進国で通用する英語だけでなく、経済成長著しい中国語圏の言葉を理解できてこそ、本当の国際人といえます。そこで、英語学科、中国語学科、観光交流文化学科の全学科において、英語と中国語を必修としています」と語る。

中国語学科では、中国政府の公認資格であるHSK5級以上とIELTS4.5以上、英語学科・観光交流文化学科ではHSK2級以上・IELTS6以上といった目標を定め、独自の語学教育を進めている。

中国語については、CIC(=Chinese for International Communication)という共通プログラムを用意した。基礎から日常会話、留学、ビジネスに使えるレベルまで、約2年で習得できるように設計されている。英語については、以前から実施されているPEP(=Practical English Program)を活用する。生きた言葉を「真似る」「なれる」「覚える」トレーニングを重視し、やはり2年間で実践的に使える英語の習得を目指す。このほか、英語学科で

は全員が3カ月以上英語圏に留学するインテンシブ・プログラムを実施し、中国語学科では通訳・翻訳の上級クラスにおいて中国からの留学生と合同で授業を受けるなどの工夫も行われている。

また、学内には、ネイティブの教員が常駐する「中国語サロン」「英語サロン」を設置。同大に多数在籍している外国人学生も交え、空き時間に外国語で気軽に交流できる機会を設けている。このサロンや食堂、ホールなどには、中国国営放送、BBC、CNNなど海外のニュースを見ることができるモニターを用意した。普段のキャンパス生活の中で、日常的に外国語に触れることができる環境が整えられているのである。さらに、学生が大学でも自宅でもいつでも学習できるようにと、eラーニングの教材も準備されているそうだ。

「交渉力」を磨く 問題解決型の授業を展開

杏林大学のグローバル教育の特徴は、「交渉力」を磨くプログラムを設けている点にもある。「総合政策学部との連携で、国際関係論、アジア政治論/中国政治外交論、国際経営論などを学びます。その中にケーススタディ演習を取り入れ、利害の対立するテーマについて、学生同士、日本語または外国語で議論を行います。1つの教室に専門の異なる複数の教員が入ることもあり、本格的な意見交換が行われます」と、赤井学部長。こういったPBL(問題解決型学習)がより実践しやすくなるよう、専用の「アクティブラーニングスタジオ」を開設した。可動式ホワイトボード、無線LANが利用できるプロジェクター、タッチパネル式の電子黒板など最新の機器を設置し、互いに顔を合わせて意見が交わされるよう、テーブルの配置にも配慮した。この教室で行われるディベートのシミュレーションには、外国人教員や学内の留学生も参加することもあり、インターナショナルな雰囲気の中で授業が行われている。

海外留学での経験を 外国語でプレゼンテーション

海外留学については、現在も交換留学・派遣留学・ Semester留学、また夏休み・春休みの短期研修などがあり、毎年約100人の学生が、何らかのかたちで海外留学を経験する。「学生の留学への関心は以前から高かったのですが、グローバル人材



日本人と留学生が交流できる「英語サロン」は双方にとって刺激的な場だ。

育成推進事業の開始以来、さらに勢いが増し、留学者数は次第に増加しています。海外での協定校は、中国、韓国、台湾、イギリス、オーストラリアなど12の国と地域における32大学におよび、外国語学部「全員留学」の構想もあることから、今後さらに増やしていく予定だ。

短期の海外研修については、語学を学ぶだけでなく、観光交流文化学科の学生が、シンガポールのホテルや旅行会社でホスピタリティを学ぶ、保健学部の学生が、カナダの病院施設を見学するなど、ユニークな試みも取り入れている。国内でも、オーストラリア大使館への訪問ツアーを催し、留学や現地事情についての話を聞くなどして、学生の意識を高めている。「海外は一度行ったらそれで終わりというのではなく、短期の研修に参加したのち本格的に中・長期の留学に出るというケースが増えています。それだけ、学生や保護者の意識も変わってきているようです」と、同大外国語学部の倉林秀男准教授は説明する。

海外留学を終えると、その期間や内容にかかわらず、一人一人の学生が、自分の興味や関心、体験に基づいて英語または中国語でプレゼンテーションを行う。留学は単なる海外生活の体験にとどまらず、プレゼンテーションのテーマを見つけるという課題ともなっているのである。

また、卒業研究報告会として、教師や外国人留学生らの前で英語または中国語で発表する機会もある。これには海外協定校の教師や産業界の人材も評価にあたり、質疑応答も外国語で行われるそうだ。

将来は企業で海外とのやりとりを必要とする業務につくほか、外国語教師、通訳、翻訳者、旅行会社やホスピタリティ産業で

の活躍など、多彩な可能性が開けている。

医療系学部の知識を 文系学部の授業に生かす

現在は八王子キャンパスで外国語学部、総合政策学部、保健学部の学生が同時に学んでいることから、文系学部と医療系の学部間での連携も盛んだ。「本学部の学生が医療系の教員から感染症についての講義を受けたり、救急救命活動の実践的なトレーニングを受けたりすることができます。これは、本格的なトレーニング施設を持つ本学ならではの利点です」と、倉林准教授は話す。国際線乗務員出身の外国語学部の教員を保健学部にも招き、看護師になるうえで役立つホスピタリティの心構えなどについて聞くこともあるそうだ。

キャンパス内で中国、韓国、マレーシア、フランス、ニュージーランドなどから来た120人以上の留学生が学んでいることも、同大の授業を多様なものにしていく要因の一つに数えられる。日本人学生が中国語と英語を学ぶ一方で、「日本語と英語を身につけたい」とやってくる中国人学生が多く、通訳ブースもある本格的な通訳トレーニング施設では、日本人学生と中国人学生がともにハードなトレーニングを重ねているという。「今後、外国語学部の学生が一斉に留学することになりますが、その期間、外国人留学生を招き、大学の設備を有効活用してもらう計画もあります。そのために、1学期間日本や日本語について学ぶといった短期のプログラムも設けたいと考えています」と、赤井外国語学部長は今後の展望を語る。英語のみならず中国語で授業ができる講師もそろえている杏林大学ならではの構想だといえるだろう。

杏林大学

1966年に杏林学園短期大学を開設、70年に杏林大学医学部と医学部付属病院を開く。84年に現在の総合政策学部となる社会科学部が発足、外国語学部は88年に始まった。現在は東京・三鷹と八王子にキャンパスを持つが、2016年より八王子キャンパスの全学部が三鷹に移転する。